

## II. 歴史・叙事

## II. 歴史・叙事

18世紀末から19世紀初頭になるとオスマン帝国支配下にあったバルカンでは、各地でアーヤーンと呼ばれる有力な地方名望家が割拠した<sup>1</sup>。彼らは、拠点とする地域の行政を牛耳って中央政府に圧力をかけ、地域内では覇権をめぐる互いに抗争した。そのため、地方の統治は混乱し、カルジャリ（野盗）やダーリ（山賊）、規律を失ったイエニチェリ軍団、デリバシやカパサズと呼ばれた脱走兵や傭兵崩れの無法者が横行した。帝国政府は、肥沃な平野部では面としての領土を支配できず、領土内に点在するいくつかの拠点となる都市においてかろうじて治安を保持していた状態であった。後にブルガリア独立運動で重要な役割を果たすことになるニコラ・オブレテノフの祖父は、そのような時代にドナウ平原の小村から狼藉者たちの難を逃れて沿岸の大都市ルセに移住した人物であった<sup>2</sup>。

ロドピ地方はスモリヤンに役場を置くヴォイドヴォルク（郡）を形成し、ブルガリア・ムスリムから選出される郡長（ヴォイヴォダ）が地方行政の実権を握っていた。山間部にあったロドピ地方は、地形が複雑でこの地方に入るのも、入ってから縦横に動き回るのも難しかったので、むしろこれらのアウトローたちに隠れ家を提供したのであり、上記のように平野部に見られた群盗の難は比較的少なかった<sup>3</sup>。もちろん小グループによる略奪や抗争はあったものの、長い間この地方で郡長を務めていたサリフ・アガ Салих ага の巧みな行政手腕もあいまって、1830年代まで治安は比較的安定していた。彼は、非行にたいしては厳罰主義、窮状にたいしては温情主義でのぞみ、地方独自の公共事業を振興して、オスマン政府から距離をおいた自治的な統治を貫いていた<sup>4</sup>。

しかし、1838年9月にサリフ・アガが殺害されると、中部ロドピ地方で党派間の対立が激化し治安も悪化して状況も不安定になった。これに拍車をかけたのが、1836年から1838年のペストの大流行だった<sup>5</sup>。ペストに襲われた住民は、疫病を恐れ村を放棄して森や山に身を潜め、人気のなくなった村は略奪にさらされた。そのような状況のなかで、ダヴィドコヴォ村を含む一帯で勢力を伸ばしたのが、バニテ Баните（旧名ラジダ Лъжда）村のベキール・アガの一族だった。ベキール・アガ Бекир ага、デリ・エミン Дели Емин、アリ・シャー Али шаа の三人の兄弟は、チル・テッペ Чил тепе と呼ばれる地域の山林の小さな一角を手に入れると、折からの材木需要に着目して製材所を建設した。これが当たって資金を手に入れると、一族の者たちは次々と新しい製材所を建設した。このようにして蓄えた資金を手に入れた彼らは、中央政権の弱体化と地方政治の混乱に乗じて、放牧地や農地などを強引に買いあさり、ボス支配を確立して地元の政治にまで介入するようになったのである。

クリミア戦争後の1856年、タンジマート改革の一環として地方行政制度が改められ、郡長は中央からの任命制となり、以降、中部ロドピ地方では通常トルコ人がこの任についた。しかし、この改革も、赴任してきた郡長が現地の事情に疎く、しばしば郷長らと結託して利権をむさぼったために、ベキール・アガー族のボス支配も一掃されることなく続いた。当のベキール・アガは1868年に死亡し、息子のアリシ・アガ Алиш ага が父親に代わってその地位についた。彼は、モギリツァ村 Могилица の有力な羊飼いやヴァルビナ村 Върбина に在住していた郡長と姻戚関係を結んでさらに勢力を広め、組織的な家畜泥棒とテッサロキニやエーゲ海沿岸の都市への転売ネットワークを構築して荒稼ぎをした<sup>6</sup>。このグループに集まったのが、ハンジ・タヒル Ханджи Тахир、サリフ・カンデロフ Салих Кандеров、メフメド・カンデロフ Мехмед Кандеров、マフムト・オルマンリーリヤタ Махмут Орманлията などの腕に覚えのあるブルガリア・ムスリムたちで、その中には、私たちの採録歌に登場するサイーダ Саида、つまりサイード・アガ Саид ага もいた<sup>7</sup>。

サイーダが無頼として活躍したのは1890年から1900年のことで<sup>8</sup>、ボス支配はバルカン戦争によってこの地方がブルガリアに併合される1913年まで変わることはなかった。しかし、1878年にブルガリアがオスマン帝国から独立して自治公国を形成し、ロドピ地方の北辺と接する東ルメリが1885年にブルガリアに併合されると、底流していた新しい時代の動きがロドピ地方にも徐々に顕在化し、ベキール・アガー族やサイーダたちのグループは、この時代の大きな流れに巻き込まれて姿を消してゆき、1913年にはバルカン戦争を機にロドピ地方もブルガリアに併合されて、新しい時代を迎えることになる。

1. 永田雄三、加賀谷 寛、藤勝 猛 著、『中東現代史1』、山川出版社1982年、74頁、永田雄三、加藤 博 著『西アジア(下)』、朝日新聞社、1993年、90-91頁。
2. Никола Обретенов, Спомени за българските въстания, Изд. на отечествения фронт, София, 1983, стр. 42-44.
3. この時代、中部ロドピの山や森は、この地方でハイティ хайти と呼ばれる無法者たちの隠れ家になっていた。ハイティは、カルジャリやダーリその他の無法者と同義語で、彼らは平野部のトラキア平原やエーゲ海沿岸地方で略奪を働いては、ロドピに逃げ込んだ。そのため、彼らは、自分たちの隠れ家となっていたこの地方の住民には手を出さなかったといわれる。ハイティのリーダーは、多くは他の地方の出身者だったが、この地方の有力者のなかからも指導者となるものが現れた。後述するサリフ・アガの弟のアジ・アガ Аджи ага がその人である。兄のサリフ・アガからペトコヴォ村やダヴィドコヴォ村を含む中部ロドピ地方北東部の統治をまかされた彼は、ある年は北のアセノフグラド地方で、翌年にはエーゲ海沿岸のクサンティ地方でと、数年にわたって略奪も働き、そこで得た資金を使って橋を建設するなどの「公共事業」を試みたといわれる。彼の活動はオスマン政府の目をひくところとなり、紆余曲折の末、結局、兄のサ

リフ・アガの制裁を受け射殺された。アジ・アガの「領地」における「善政」が郡長であった兄への対抗意識によるものであったといわれ、加えて、彼の活動を放置しておく、それまでオスマン帝国と距離をとって自治的な方針で運営されてきた地方政治も危うくなりかねなかったため、兄のサリフ・アガは弟の射殺という行動に出たものと考えられる。

Чеперале-1, стр. 74-79 および Манастир, стр. 34-35 参照。

4. Чеперале-1, стр. 74-83.
5. ブルガリアのペスト流行については、Надя Манолова-Николова, Чумавите времена (1700-1850), Изд. “ИФ-94”, София, 2004 を参照。この時代の中部ロドピ地方のペストの大流行については、СБНУ, кн. 54, стр. 215、Чеперале-1, стр. 229、Чокманово-2, стр. 297、Манастир, стр. 20-21 など村誌を参照。ロドピ地方には、この時にペストの発生した村を捨てて移転した村が見られ、住民はいまでもその時の出来事を語り伝えている。
6. Петково, стр. 160 и Славейно, стр. 57-58. ベキール・アガー味の家畜泥棒については、当時の記録も伝えている。вж. Попконстантинов-1970, стр. 158. 一味の何人かのリーダーは、1870年にコモティニ地方で捕らえられ、ギリボルで裁判にかけられてテッサロニキの牢獄に投獄されたという。
7. Петково, стр. 158.
8. Петково, стр. 218.

## 1. Хайдутите се молеха

- |   |                |   |
|---|----------------|---|
| 1 | хайдутене      | чл. < хайдуте = хайдути < хайдутин.     |
| 3 | й              | съюз = и.                               |
|   | лето й пролето | = лето и пролето. V-C-11 歌の 6 行目の語注を参照。 |
| 8 | керванджие     | = керванджия.                           |

ハイドゥティ **хайдути** は、言い伝えによれば、オスマン帝国で支配者たちの横暴のために村から逃亡して山地に立てこもり、集団を形成して彼らに抵抗し、略奪品を貧しい村人に与えるなどして圧政下の民衆から英雄視されたという<sup>1</sup>。彼らは、通常、身近な隠れ家を提供してくれる森に覆われた山間部に拠点を置いて春から秋に活動し、冬になると村にもどって暮らした。しかし、彼らの行動は、常に義賊的だったのではなく、純然たる略奪目的で富裕層や、時には農民を襲うこともあった。ロドピ地方の民衆歌謡でも、ハイドゥティという語は、義賊と匪賊どちらの意味にも使われている<sup>2</sup>。

ロドピ地方が飢饉のとき、自らキャラバンを仕立てて平野部の「村に入り、農場を襲い、扉や穀物倉

を打ち壊して、麦、粉、豆その他の食料を南京袋に詰めた。金銭や金目の物は取ること」はなく、略奪した食料を村に持ち帰って人びとに配ったという義賊的な性格の徒党<sup>2</sup>を組むこともあった。もちろんこれは、襲う側からする視点で、「金銭や金目の物」には手を出さないという規範があったとはいえ、襲われる側からすれば彼らが匪賊であることには変わりなかった。

金品を狙う匪賊を思わせるハイドゥティの歌も、数多く歌われている。例えば、НПРК, № 1281 の掲載歌では、春になって山に緑が生い茂り、動き出したキャラバンを襲うことを心待ちにするハイドゥティたちが、耳障りな声で鳴く鳥に問いかけて歌う。

гладен ли си, бра гарваньо, жален ли си,	ひもじいのかい、なあ鳥よ、喉が渴いてるのかい
ям се моли да си ми дойде,	それとも来るように願ったのかい、
да си ми дойде лято й пролетье,	春が来て夏が来るようにと、
да се лисни планинона,	山が緑におおわれるようにと
планинова, двана бука,	山が、二本の樵の木が、
двене вейки деребашене,	デレバシの地の二本の枝が緑におおわれて、
да си ни тѳрнат керванджие,	キャラバンが動きだすようにと。
ти ща ми стѳпиш на белен камен,	さすればお前は白い岩に飛び降りて、
яз ща убия баш керванджия,	俺がキャラバン頭をやれば、
ти ща му пиеш ясноно кѳрве,	お前は朱 <sup>あけ</sup> の血を飲み、
яз ща си сбирам жѳлти алтѳне,	俺は黄金 <sup>こがね</sup> の銭を集めるだろう
жѳлти алтѳне, бели грошове.	黄金の銭を、白銀 <sup>しろがね</sup> の銭をな。

私たちの採録歌は断片的だけに、歌われているハイドゥティがどのような性格のものか、テキストだけでは判定しがたい。しかし、採録数の上では匪賊的なものはるかに多く、歌詞の展開も多様で人びとの興味を引く内容のものが多いことを念頭に置くなら<sup>4</sup>、私たちの採録歌も、本来、そのような内容を持っていた歌が断片化して伝えられたものと考えられる。

1. ハイドゥティは、ブルガリアのみならずバルカン各地に見られた現象であった。同様の集団は、セルビアではハイドゥク хайдук、ギリシアではクレフティス κλέφτης と呼ばれる。
2. НПСР, стр. 454-455. セルビア語の「ハイドゥク хайдук」もギリシア語の「クレフティス κλέφτης」も、同じく両義を持っている。
3. Чепеларе-1, стр. 125-127.
4. さらに НПСР, № 938-939 および НПРК, № 439 を参照。

## 2. Горице ситна зелена

1	горице	зват. < горица. умал. < гора.
2	е	мест. 1 л. ед. им. < я = аз.
	съ	= съм.
	веровал	< верувал < верувам = вярвам. вж. РБЕ, т. 2. 前置詞 на とともに用いて「信賴を置く、信賴する」の意味。
4	фатиха	аор. = хватиха < хватя.
5	роки	< рьки = рьце. 双数に由来する роки は、中部ロドピ地方ではダヴィドコヴォ村よりも西の地域で用いられる。この複数形については、вж. ГСМС, стр. 36.
	вързаха	下記の 6 行目の語注に見るように、この語に含まれる ъ は、スモリヤン方言では広い о で発音される。
6	напреш	вж. РР, кн. 2. 「前へ」。
	потен	чл. < пот = път. この о は、前行の роки 同様に、スモリヤン方言に特徴的に現れる広い о で、この地方の民衆歌謡集では通常 ô と表記される。歌い手は、日常会話でこの広い о を用いることはないが、歌ではしばしばこの音を使う。前行の語注でみたように、歌い手は ъ と広い о を混用している。ちなみに、歌い手の女性はこの村の出身だが、彼女の夫はスモリヤン地方のモムチロフツィ村の出身である。

森は、盗賊、反逆者、駆け落ちに走る若者たちの隠れ家としてよく歌われる。前半の 3 行は、そのような機能を持つ森を歌う。

森は、中世には洋の東西を問わずアジールであった。川崎寿彦は、シャーウッドの森とロビンフッドを論じて次のように言う。

「…このフォレストにあえて入り込む人びとがいた。〈アウトロー〉、すなわち法に捨てられ、またある場合にはみずから法を捨てた無法者たちである。彼らのあるものは市民法を犯したかどで、またあるものは御獵林法を犯したかどで、『今後は法の庇護を受ける資格がない』ことを公的に宣告されたのであった。これは同時に『今後は法を遵守する義務もない』ことを意味した。逆説的な特権とも考えられよう。…つまり彼らはオオカミと同じ境遇になったのだと考えてよい。だからオオカミと同じく、森、特にフォレストに逃れた。もっとも過酷な法の支配するこの異界は、逆説的にもっとも安全なアジールであった」<sup>1</sup>。しかし、近世に至って、「常備軍をもち、…近代的刑法、訴訟法を備え、警察権力を一手に掌握した国家が生まれるとアジールは全面的に廃止され、十五、六世紀からおそくとも十八世

紀にはヨーロッパ諸国からアジールは姿を消して」<sup>2</sup>いったという。

ブルガリアでも、時代はすこし遅れるが、ほぼ同様のプロセスをたどった。解説で触れたように、18世紀末から19世紀初頭になるとオスマン帝国を支えていた諸制度がうまく機能しなくなり、それに対応して地方に不安定な状況が生まれる。その状況のなかから生まれてきた匪賊や義賊などのアウトローに対して、権力の側では地方行政や警察権力機構の改革や組織強化を通し対処を迫られたのである。その過程で、アジールとしての森は、徐々にその役割を狭めていったと考えられる<sup>3</sup>。

民衆歌謡では、ハイドゥティたる義賊と森との親和的關係が理想化して歌われるようになるが、この頃には、既にそのような関係は遠い伝説的なものとなっており、義賊たちは慣習法的な森の庇護を失って権力と直接対峙していたのである。後に、彼らは、オスマン帝国への抵抗と独立を求めて戦った英雄としてイメージに作り上げられて行くが、そのような活動を当初からしていたわけではなかった<sup>4</sup>。

後半の3行は、鎖に繋がれて官憲に引きたてられて行く者が歌う歌のさわりである。ここでは、アジールとしての森が変化していることを見抜けず、古くから伝えられてきた森を信じていた主人公の姿が歌われている。その意味で主人公は、旧習墨守の徒であり時代に裏切られたのである。それは、理念に突き動かされて独立運動を推し進めたわけではなく、原初的な抵抗運動としてわずかな武力を用いてあくまでも行動でしか生きることができなかつた多くのハイドゥティたちがたどった道でもあった。彼らは、ブルガリア独立後の新しい動きに飲み込まれて急速に伝説化して姿を消していったのである。

採録歌は、これら2つのさわりの部分が結びつけられたものと思われるが、具体的な筋が展開するまでには到っていないので、種々の解釈がなりたつ。ほかにも森に隠れていた盗賊やハイドゥティが官憲に捉えられて引きたてられて行く歌が、この地方で数多く採録されているので、採録歌もこれと関連づけて、本章に分類しておく。

1. 川崎寿彦、『森のイングランド』、平凡社ライブラリー、1997年、80-81頁。阿部謹也は、中世ヨーロッパにおいて何らかの犯罪を犯して法的な保護を失った人びと、いわゆる「人間狼」は、「村を追放されるときには『おまえの妻を未亡人とし、子供を孤児とする』と宣言されます。そして狼として追放されるのです。時には狼の毛皮をかぶせられることもあったようです。狼として追放された場合はもはや人間ではなく、いっさいの縁を切られるわけです。こうして村を去って行くのです」と記している。阿部謹也、『ヨーロッパを見る視覚』、岩波現代文庫、2006年、315頁。さらに、阿部謹也、「ヨーロッパ中世賤民成立論 — 二. 人間狼について」、『中世賤民の世界』、ちくま学芸文庫、2007年、221-234頁を参照。
2. 阿部謹也、『中世の星の下で』、ちくま文庫、1986年、320-321頁。
3. 19世紀末から20世紀初頭のブルガリアでは、犯罪者に逮捕の手の及ばないアジール空間は、教会、モスク、有力者

の屋敷などに残存していた。вж. С. Бобчев, Българско обичайно наказателно право, в СБНУ, кн. 37, 1927, стр. 300-302. 次に掲げる第3歌 Сахида са е загубил の註解も参照。

4. この時代のハイドゥティをめぐる動きについては、D. ジョルジェヴィッチ、S. フィッシャー・ガラティ共著、佐原徹哉訳、『バルカン近代史』、刀水書房、1994年、第2章、第3章を参照。

### 3. Сахида са е загубил - I

1	Саида	< Сахида.
	йе	= е < съм.
2	нийде	= никъде.
	нима	= няма.
	мейдан	< meudan (T). = мегдан. 「広場」。срв. РР, кн. 2.
3	нема	= няма.
4	бубайко	< бобайко. 「父ちゃん」。< boba / baba (T). IV-E-3 歌の12行目の語注を参照。
	тръсеше	= тръсеше.
15	му	前行まで父親の語りかけとして2人称単数形の代名詞が用いられているが、ここでサヒーダを表すために3人称単数形が用いられて歌い手の視点が入り込んでいる。

1890年から1900年頃にかけて名をはせたサイド・アガ Саид ага、通称サイーダ Саидаあるいは Сахида サヒーダは、若い頃、近くのスラヴェイノ村 Славеино で羊飼いをしていたが、あるとき主人にひどく殴られたために彼を殺害し、森に逃れ無法者になった<sup>1</sup>。

当時、中部ロドピではブルガリア・ムスリム出身のベキール・アガー族のボス支配が続いており、ダヴィドコヴォと近隣の地域では彼の息子のアフメドが羽振りを利かせ、ビンバシ binbaşı (千人隊長)の渾名からもわかるように多くの手下を集めて、ゆすりやたかりを働いていた。

森を出たサイーダは、このアフメド Ахмед の一味に加わったのである。当初、アフメドの馬の手綱持ちのような三下仕事をしていたが、大柄で背が高くがっしりした体格で<sup>2</sup>、生来、恐れ知らずで腕っ節の強かったサイーダは、めきめきと「頭角」を現し、華美な服を身にまとい駿馬を乗り回して、アフメドと張り合うようになった。サイーダは、当時、ダヴデヴォ (現在のダヴィドコヴォ) 郷で郷長を務



めアガの尊称で呼ばれていたアフメドにとって代わろうとするまでになった。

サイーダの屋敷はダヴデヴォ村の上手の集落にあり、アフメドの屋敷は下手の集落にあった。この集落のアフメドの屋敷のそばにサイーダの妻の両親も暮らしていたので、彼はよく下手の集落にも出入りしていた。ある時、舅の家を訪れた帰りに、サイーダはアフメドの屋敷の塀を馬に乗ったまま飛び越え、アフメドを前にして「これからはアガの地位は俺のものだ。川向こうには通り抜けならんぞ」と言ったという<sup>3</sup>。事実、この頃になると人びとは彼に尊称をつけてサイード・アガ、通称サイーダと呼ぶようになった。「アフメドは、もはやサイーダに馬を引かせることができなくなったばかりでなく、ダヴデヴォ郷の第一人者の地位を彼に奪われるのではないかとひそかに恐れるようになった。それでサイーダを亡き者にしようと決心したのである」<sup>4</sup>。

アフメドは、スラヴェイノ村の村長に法外な金銭を要求し、取立て役にサイーダを指名した。彼が村びとの反感を買って村びとの仕打ちを受け、あわよくば彼が亡き者にされることを願ったのである。サイーダは、馬で村長宅に乗りつけると、馬上から金を要求した。サイーダに馬から下りるように懇願する村長を尻目に彼がなおも強く金を要求していたその時に、ゲオルギ某という名の男が檜の丸太を振りかざして殴りかかった。形勢不利と悟ったサイーダは抗うことなく退散したため、この企ては失敗に終わった。

アフメドは新たな一計をめぐらせた。彼は、ダヴデヴォ村のキリスト教徒有力者ニコラ・ガジャロフ Никола Гаджалов を信頼し、足しげく彼の家に入出入りしていた。そこで、アフメドは、ニコラに頼んでサイーダも含む一党の者たちを宴席に招待させた。アフメドは、いとこのエミン Емин を宴席の部屋の押入れに忍ばせ、ニコラの息子のトドル Тодор を近くに張りつかせた。トドルは、サイーダが彼の妹をからかったのでひどく彼を憎んでいた。

主人が、言い含められていたように、サイーダに次から次へと酒を勧めてしこたま酔わせたのを見計らって、アフメドはエミンと一緒にサイーダに飛びかかり彼の首を縄で絞めた。サイーダは剣を抜いてエミンの腿を切りつけたが、トドルが加勢しエミンが縄を絞めあげてサイーダを殺した<sup>5</sup>。

アフメドたち一党は散り散りに逃げ、サイーダの死体は夜なかに騾馬に乗せられて隣村スタルニツァ Стърница の村はずれの檜の森に埋められた。事情を知らないサイーダの父親は、まる一週間、息子を探して訪ねまわったが、誰も知るものはいなかった。

スタルニツァ村のブルガリア・ムスリムの住民が、偶然、サイーダの死体を見つけて知らせたところ<sup>6</sup>、「お前らがやったのだろう」と言われて、「村を焼かれてしまうぞ、別の場所にもって行って埋めろ」とどやされてしまった。スタルニツァの村びとは、夜なかにサイーダの遺体を掘り起こしてペトコヴォ村の橋のたもとに埋めた。とはいえ「やはり、この真夜中の埋葬は隠し通すことができなかった。こと

の次第を皆がみな知っていたわけではないが、ダヴィドコヴォ村の誰もが、それがサイーダの埋葬だと知り<sup>7</sup>、以来、ダヴィドコヴォ村やペトコヴォ村の一带でこの出来事が広く歌われるようになったのである。

採録歌は、6行目で「от конак ф крѣчма влизаше 屋敷から [出て] 居酒屋に入り」と歌われているが、конакは「役所や富裕な人の屋敷」を意味するので、ここでは一帯を支配していたベキール・アガー族の人物の屋敷、特にアフメド・アガの屋敷が念頭に置かれているとも考えられる。

10行目からサイーダを探し回る父親の言葉を歌い伝えるが、15行目で「либе му 彼の愛しい人」と歌われて歌い手の視点が混ざり合っている<sup>8</sup>。

- 
1. вж. Петково, стр. 218. 当時、森はまだかろうじてアジール機能を残していたために、サイーダはここに逃れたと考えられる。このアジール機能は、森が所有権の特定されない「無有」の場所であったことと深く結びついていた。しかし、前掲歌の註解でも述べたように、19世紀末にブルガリアが近代国家の形成に向けて歩みを速めるにいたり、その機能は急速に失われて行く。さらに、後出 6. Провикна се Дели Димо の註解を参照。
  2. вж. Славеино, стр. 64.
  3. Петково, стр. 219.
  4. Манастир, стр. 43.
  5. サイーダ殺害の経緯は、Манастир, стр. 41-43 による。しかし、Петково, стр. 219 は、トドルが斧でサイーダに一撃を食らわせて致命傷を負わせた、と別の聞き書きを伝えている。
  6. Манастир, стр. 44 は、この村びとはダヴィドコヴォ村のベキール・アガに知らせたと記しているが、当のベキール・アガはすでに死亡していた。ベキール・アガー族の一人、おそらくはアフメドに知らせたのであろう。
  7. Манастир, стр. 44.
  8. 後出 5. Сахида са е загубил - III, 12-14 行目と比較。

#### 4. Сахида са е загубил - II

- |    |         |                        |
|----|---------|------------------------|
| 1  | йе      | = е < съм.             |
| 4  | трасеше | = търсеше < търся.     |
| 16 | й       | = и. 口調を整えるために用いられた小詞。 |

前掲歌と異なり、父親が探し回る場所が 6 行目以降に「од дюкян в дюкян ходеше, / от кръчма ф кръчма ходеше 店から店へ歩き回り、居酒屋から居酒屋へと歩き回って」と歌われている。他の多くの採録歌でもこのように歌われる。こちらの方が、本来の歌詞に近いと考えられる。

## 5. Сахида са е загубил - III

- |    |         |                      |
|----|---------|----------------------|
| 11 | де      | = къде.              |
|    | да      | 前の疑問詞強調。             |
|    | Саеда   | < Саида < Сахида.    |
| 12 | конаци  | мн. < конак. 美称の複数形。 |
| 14 | люлчица | умал. < люлка.       |

13 行目以降で「любе ти плаче ф конаци, / дете ти плаче ф люлчица お前の愛しい人はお屋敷で泣いているぞ、お前の子供は揺り籠で泣いているぞ」と歌う。この歌詞は、ロドピ地方の哀悼歌にも特有な表現で、例えば、チェペラーレで 1939 年に採録された歌（НПСР, № 108）では、夫に先立たれた妻ヤンカは次のように歌う。

— Чуеш ли, любе, видиш ли !	「聞いているの、ねえあんた、見ているの !
Любе ти плаче на гробас,	あんたの愛しい人は墓で泣いているわ、
майка ти плаче в сараён,	あんたの母さんはお屋敷で泣いているわ、
дете ти цръка във люлька,	あんたの子供は揺り籠のなかでむずかっているわ、
стадо ти блее в кошари,	あんたの羊の群れは柵のなかでめーめー鳴いているわ、
конче ти цвили в тарлѝна !	あんたの馬は畑でいなんでいるわ !

既知の要素を使って新しい歌詞を仕上げる民衆歌謡の常套的な手法である。

## 6. Провикна се Дели Димо

- |   |      |  |
|---|------|--|
| 1 | Дели | < deli (T). вж. РБЕ, т. 3. 原義は「狂った」だが、ここでは「荒々しい、 |
|---|------|--|

抑制の効かない」の意味。エピセツトとして人名などに用いられる。

Димо	умал. < Димитър.
3 куруджие	< korigu (T). вж. РР, кн. 2. 「(牧草地や森、畑の)番人」。
4 куршумджие	< kurşuncu (T). вж. НПСР, стр. 533. 「射撃の名手」。
9 вази	вин. = вас < вие.
16 шилетарче	умал. < шилетар.
20 че	結果のニュアンスを含む接続詞。 вж. РСБКЕ, т. 3.

森番デリ・ディモ Дели Димо を登場人物とするこの歌のヴァリエントは、数は少ないがチェペラーレ Чеперале で採録された НПСР, № 850 と № 851 やスヴェタ・ペトカ村 Света Петка で採録された Стоин-1934, № 95 などロドピ地方でいくつか採録されている。

куруджие / корджия は、語注に記した通り「(牧草地や森、畑の)番人」の意味で、ロドピ地方でよく用いられるトルコ語語源の語だが、他の地域では一般に падалар пьдар と呼ばれる。これは、オスマン帝国時代から存在した村の行政職の一つで、村長と参事会のメンバーの合議で任命された<sup>1</sup>。ちなみに、村長と参事会員は、出稼ぎや移牧で村から出ていた住民が戻ってくる春から夏にかけての祝祭日にあわせて開催される村の議会で選出された<sup>2</sup>。

彼の職務は、「村の資産を保全する」<sup>3</sup> ことにある。村の資産とは具体的には畑、菜園、森などを指し、これらを家畜の進入や人の手による危害から守ることが務めとされた。そのため、彼らには、畑などに侵入した家畜の確保、その所有者にたいする科料の決定など公的な権力が与えられていた。家畜は、餌の草も畑の作物や若木の葉や芽なども見境なしに食べるので、特に監視が必要であった<sup>4</sup>。

採録歌では森に入り込んだ羊と羊飼いが歌われている。森は、オスマン帝国の時代から入会地として用益権が認められていた。19世紀後半のオスマン法の規定では、住民が、住宅、納屋、家畜囲いの建設や補修、農具の作成、薪炭として利用する分には国有地の森林の伐採は無料であった<sup>5</sup>。また、山林内の水や放牧地としての利用も認められていた<sup>6</sup>。さらに、森の木の枝葉は、冬期の家畜の飼料となった。「まだ夏のうちに樗やシデなどの木の枝を切って、羊や山羊の冬場の餌とするためにリストニツェ листници として蓄えておく。松の枝は冬場の羊の餌のчетуна чегуна になるし、ブナの枝は波罗с борос といって、役畜の餌に用いられた」<sup>7</sup>のである。

それだけに多くの規制もあった。オスマン時代には、原則的には、森には用益権だけしか認められておらず、個人がその用益権を独占することも認められていなかった<sup>8</sup>。さらにまた、利用の時期や形態にも規制があった。例えば、「冬に葉の落ちる樹木は、樹液のでない10月15日から5月15日までし

か伐採してはならない」<sup>9</sup>とされていたし、冬場の家畜の餌となる枝葉の確保は、霜の降りるまでの秋が作業時期であった<sup>10</sup>。森番は、このような規制の違反に目を光らせていたのである。

19世紀中葉に木材の需要が高まると、この地方の有力者はこぞって製材所を設立した。彼らは、森を囲い込むようになり、盗伐も増加した。森番の監視が一気に強化され、取り締まりはさらに厳しくなった。先にも触れたように、森に羊が入っただけなら、森番はこの羊を確保し飼い主に料金を貸すだけで済んだのだが、デリ・ディモが羊飼いに銃を向ける<sup>11</sup>という「一大事件」が発生し、これが歌に歌い継がれることになったのは、このような時代背景も影響していたと考えられる。

1. **вж. Чокманово, т. 1, стр. 79 и Соколовци, стр. 78.**
2. **вж. Чокманово, т. 1, стр. 78.** 村長選出の基準は、たとえば **Петково, стр. 150** では「来訪する客人や役人をもてなすのであまり貧しくなく、長期にわたって出稼ぎに出ることがなく村の職務に携わる時間がもて、低い報酬に同意する」人物とされている。長期間村を離れる人にかんする規定は、他の村でも認められる。またオスマン時代のキリスト教徒とムスリムの共住村の村長について、**Момчиловци, стр. 95** には、「共住村では、しばしばこの2つのグループに各々の村長が立てられた」と記されている。共住村の村全体の問題は、年長の村長が議長を務め、双方のグループのメンバーからなる長老評議会の総会で検討され決定された。**вж. Орехово, стр. 96-97.**
3. **вж. Чокманово, т. 1, стр. 79.**
4. 北西ブルガリアの慣習法では、「もし、畑やとうもろこし畑、あるいは葡萄畑に牛、馬、羊などが入り込み、餌を食んでいたら、バダールはこれらの牛や馬あるいは羊を村に連れてゆき、村役場のそばに設えられた家畜囲いに閉じ込めておく。持ち主は、これらの牛や馬あるいは羊を囲いから連れて行くときに、罰金を支払う」とされている。**вж. Маринов-1894, стр. 360.** このような処置は、基本的には、ロドピ地方でも同様であった。
5. **Павелско, стр. 138.**
6. **Чепеларе-3, стр. 44.**
7. **вж. Чокманово, т. 2, стр. 29.**
8. **Чепеларе-3, стр. 443-44.** 同書は、「20世紀初頭から1992年まで、森林の個人所有は、農地の中にあるものを除いて、*de jure* (法的には) 存在しなかった。オスマン当局も、文書上は、森林の所有権を決して認めたことがなく、水、放牧地、および一部の資材の用益権だけを認めていた」と記す。近年出版されたロドピ地方のいくつかの村誌では、例えば **Чокманов, т. 2, стр. 28** に見られるように、山林の私有が前面に論じられている。しかし、同書にある通り、かつて山林の売買は単独ではなく、畑、放牧地などの売買に付随して行われた。そのため、製材所といっても、地域的な需要を満たすだけのもので、平野部まで広がる販売網をもつ林業は、輸送手段や輸送路の整備されてくる両大戦間期にはいつてからのことであった。

9. ダヴィドコヴォではベキール・アガの一族がダヴィドコヴォ周辺の山林を囲い込むようになる。一方、牧羊業の拡大に応じて放牧地が必要となり、キリスト教徒とムスリムの村民が共同して新たな入会地の確保に動き出し、ベキール・アガ一族と対立関係にあったことが知られている。この時も、売買されたのは用益権だけで、木材用の森林の伐採を目的としたベキール・アガの山林で、水や放牧地としてここを利用する分には、原則的には、村民にもその権利が認められていた。しかし、ベキール・アガ一族はこれを認めなかった。このような対応のなかで、山林の私有という観念が徐々に浸透してきたと考えられる。вж. Манастир, стр. 35-38.

10. СБНУ, кн. 54, стр. 275-276.

11. НПСР, № 850 と № 851 では、デリ・ディモが羊飼いに銃を向ける場面が歌われている。森番は、近代ブルガリア国家が成立すると、制服を着用し大きな警察権力をもつ森林監視官 *горски стражар* という国家統治機構の末端に組み込まれてゆく。アーウィン・サンダース著、『バルカンの村びとたち』、平凡社、1990年、22頁参照。

## 7. Турци са минавал и за Рада кон довели

- |    |            |  |
|----|------------|--|
| 6  | кондисвали | < кондисвам < <i>kondu</i> < <i>kon-</i> (T). вж. БЕР, т. 2 и РР, кн. 2. ここでは「やって来る」の意味。同義語をスラヴ語起源の語とトルコ語派生の単語を重ねて用いるこの地方でよく観察される語法。 |
| 8  | де         | вж. РБЕ, т. 3. <i>де</i> を繰り返し、場所を列挙する接続詞として用いる。   |
| 12 | коне       | <i>бр.</i> = <i>коня</i> < <i>кон.</i>   |

私たちの採録歌では、キリスト教徒の娘をトルコ人が嫁として迎えにくる様子が歌われている。社会主義体制前のロドピ地方の農村では、宗教や言語の異なる混婚はまれであったので、何らかの事情があったものと想定される。親の欲得ずくで娘がこのような結婚を迫られるというテーマの歌は、数多くある。この歌も、後半部に同様の内容が続いていたのかもしれない。最も類似したヴァリエントは、1955年にブルガリア・ムスリムの村ザバルドで採録されている<sup>1</sup>。歌い手は、もちろんムスリムで、女性である。私たちの採録歌と同様に、このヴァリエントでも主人公の女性は、スタンカ *Станка* という名前からしてキリスト教徒である。この歌では、さらに続けて次のように歌われる。

Турци Станки си говорят:	トルコ人たちはスタンカに言いました、
— Стани, Станку, гюл фиданку,	「立つんだ、スタンカ、薔薇の若枝よ、
тòчи вино немёрёно,	酒は量り切れないほどたっぷり注ぐんだ、

зймай пари неброени !—  
Станината стара майка  
по двор ходи, сълзи рони  
и на турце жёлно дума:  
— Турце, турце, анадолци,  
наша Станка е главёна  
главёна и спазарёна.

数え切れないほどの金を取るがよい！—  
スタンカの老いた母親は、  
屋敷の庭を歩き回って涙を流し、  
トルコ人たちに涙声で訴えました、  
「トルコ人よ、トルコ人よ、アナトリアから来た人たちよ、  
あたしたちのスタンカには許婚者がいるんです、  
許婚者がいるんです、売れたんです。

編者のアタナス・ライチェフは、最後の行の「売れたんです спазарёна」という言葉について、「娘の父親は許婚者の父親と、娘の代償に何らかを受け取ることになっている」とする祖母の言葉をコメントして記している。すでに許婚者のある娘のところに、美しい娘のうわさを聞いてか、トルコ人が彼女を嫁に欲しいとやってきたのだろう。

ちなみに、現在でも形だけとはいえ、新郎新婦の父親のあいだで花嫁代償の額を交渉する場面が、西ロドピや北東ブルガリアのトルコ人たちの婚礼儀礼に観察される。

---

1. НПСР, № 148.